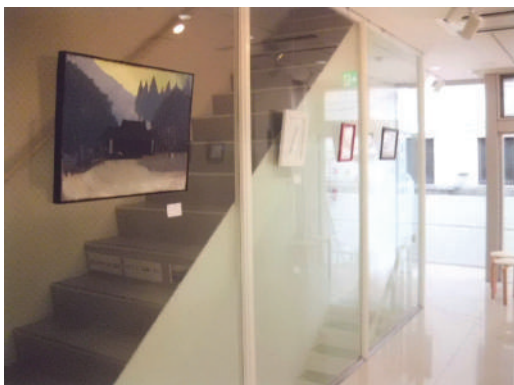
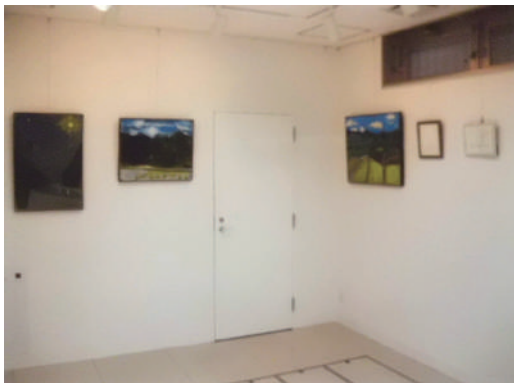
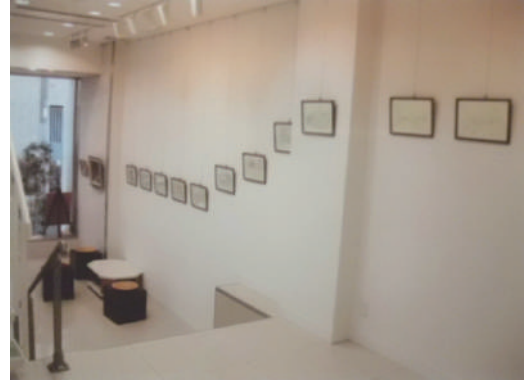


2011 [3.15 - 20] / 茶白山画廊

これからの月日の重なりにより、私の作品がどのように変化し表現されていくのかという、未来へと繋がる興味心を抱いて頂ける機会になればなど想っております。

描き始めて1年程と早すぎる発表だとは思いますが、今回はその第1回初個展となります。

本日はお忙しい中、お越しいただき誠にありがとうございました。



展示しています作品のテーマは特に御座いませんが、私が素直に綺麗だと感じるものを描いております。

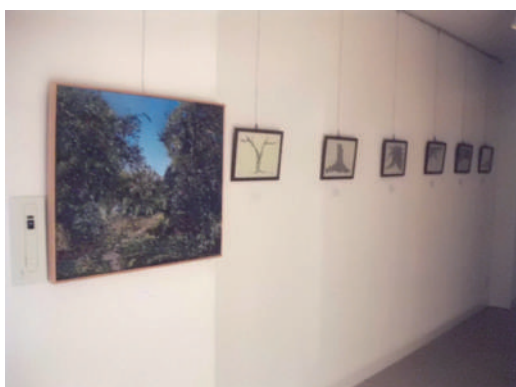
近くの大阪を流れる淀川沿いには、手付かずの自然が所々に残っており、その場所では、様々な植物のありのままの存在を感じ取りやすい空間となっているため、自然と惹きこまれ夢中にさせてくれます。

樹も雑草も人も植物も、それぞれの姿形で覆われた奥に潜む存在は皆繋がっていて、そこで私は教わり作品の発展を望んでいます。

見えている事物からうっすらと醸し出している見えない存在を、鮮明に捉えようとするのが私にとっての幸せであり、充実を育んでいます。同時に完成される絵は、当然ながらまだまだ鮮明に記せていない作品となっておりますが、普段目にする樹や草から比べると、その存在を感じ取り易くなっていると感じていただけたなら幸いです。

このことから、今回の発表を通して新たな視点や想像が、ほんの少しでも鑑賞して頂いた方に芽生えることを願っております。

本日はお越しいただき誠に有難う御座います。





ご来場いただき誠にありがとうございました。

描き始めて丁度3年が過ぎました。約1000日、周囲の協力で絵を描くことのみ専念させてくれ、そんな日々の流れに比例し、主に手付かずの自然からの教えで絵というものを成長させてくれ、又沢山の気づきを与えられ、現在の自分、作品となっています。

残念なことにとわしにとって、また多くの人にとって居心地の良かった樹の多い一部の淀川沿いにあった僅かな自然は、大災害が起きたかのように失われました。仕方がないと言い切れないのが人の手によるものですね。しかしそれによって作品に変化を与えてくれていることで、益々自然の偉大さは私の理性を蝕んでくれています。

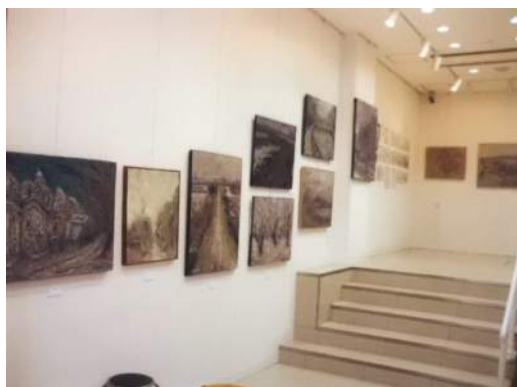
虫の小さな嫌がらせもほとんど無く、砂埃の失われた都会の中で、どうやって自然の圧倒的な存在を思い知ることが出来、恐怖に襲われ、その圧倒的支配の隅で、私たち人間は生きているのだという感情をたえず実感できるのでしょうか。

人は皆、何者でもなく、自分を人だと認める正当そうな現実から、中々抜け出すことは難しいことですが、そんな人の生による普遍的な課題のように感じる難題を、平等に与えられた想像という力によって地に立つことから、死生観は豊かに生まれ、自然との共存に向かう第一歩を踏み出せるのだらうと感じております。

自然の中に身を置き、キャンバスの前に立ち、考える意志を亡くす間の身を覆われた空間には、とても優雅でありながら空虚と孤独に心を委ねさせられます。

瞑想とは違う、必ず形として残ってくれる、この、絵を描くという行為に巡り合わせてくれたことへの自覚し難い、なんとも言えない感謝の念によって、作品を通じ鑑賞された方の心になんらかの動きが生まれたならば、それは確実に予想外である最大の唯一の喜びであり、そのような方の奥深い感情に出会えることは私をより成長させてくれています。

また、ここ茶白山画廊で個展を開いた際には是非お越し下さい。





案内:

- ・その心との対話
- ・生命の調べ
- ・窓の向こう
- ・肖像

描き始めからの約4年間、画風が様々に変わってきていました。その様子は、意識の変化によるものでした。

そしてこれからも変化していきます。このようなことを詳細に、またこのことによって知ったことを述べたものが

「自然書 - 自然のもたらすもの」という本です。

ですが、言葉で言えることはどうでもいいことです。しかしどうでもよくはない意識の位置にとっては、言葉は大切なものなのです。このような想いになれたことが今展開催のきっかけです。意識の位置というのは、わたしが勝手に言っていることで、言い方を変えると視点の持ちようということです。そして今展を大きく囲う言葉が、

それにそれは在らず

わたしにわたしも在らず

しかし互い、と認識出来る様子は光のようで、

それはそれやわたし、

そしてあれこれ、

の、

蠢き絡み合ったひとつの源より、

共に在る、が創る隙間から射している。

と、なります。

私たち、そして全てには意識、心があります。そこから目を背けることは簡単であることから、そうは出来ません。私たちと言っている時点で、もう個別化されています。

何故、わたし、あなた、や、樹、雲、明日、さっき、等と分けることができるのでしょうか。

そうしないと知り得ないものがあるからです。それは深い場所での共感、共有、創造です。

それはわたしたちの意識によってです。その為にも、それにそれは在らず、わたしにわたしも在らずといった立ち位置を、維持しようとする静寂が必要です。でなければ単なる依存に陥ります。

「源」と題する根源自体を取り出すことは出来ません。それは直感に似たようなものであるかと想えるからです。

しかし、あらゆる場所に、というか全てが動揺、歓喜しているかのような蠢きをはみ出させているように、そこまでの道標なら可能なのです。

わたしにとってそれを認識する意識を持続させることが描くことです。そこには心の中の嘘、偽り、欲等は持っては行けません。その描いている中の無数の瞬間それぞれに目標や目的、希望、発見、喜びがあることを、後に思考は気づくのです。

なのでわたしにとっては描いている間がわたしにとっての達成、成功であり、それによって描かれた絵は、皆様と目を合わせたときに達成、成功であります。

自動的に何も訴えない、そこに在るだけの樹のような、墓のような、大仏のような絵になっていくでしょう。それらは様々な想いを受け入れる余地を持っています。それは空白と言い換えられます。それを「源」と題するものとしたとき、それは皆様によって知ることが出来ます。

そしてその知ることが出来ること自体が「共に在る、が創る隙間」ということです。

なので個人として存在していること自体に大きな感動があります。その感動の質感のような違いが、個々様々な行いに表れます。全く同じ仕事などありません。しかし共感、信頼し合います。それぞれには本当は参考書などありません。

あるとすれば自然が皆に共通した参考書です。



その花で、あなたの心はあなたに、どのような作品を見せますか。

その景色で、あなたの心はあなたに、どのような作品を見せますか。

その出来事で、あなたの心はあなたに、どのような作品を見せますか。

その絵で、あなたの心はあなたに、どのような作品を見せますか。

あなたの心で、あなたの目はあなたに、どのような今を見せていますか。

藤木寛充 / Fujiki Hiromitsu

1980 和歌山に生まれる

2010 絵を描き出す

わたしは音楽家を志していました。

しかし油彩具を頂いたことで絵筆を握り、色を乗せたとき、わたしの魂、心、精神、身体の歯車がきっちりと噛み合う強い実感を体験しました。

そして兎に角描きたい衝動のまま進み、今を迎えております。

Croquis

自然風景に並ぶ純粋さをわたしは求め、純粋に描く活動をしています。

純粋に描くとは、Croquis（クロッキー）の語源通り、目の前で見て、即興的に描く、衝動的に、というニュアンスであり、想像において積極的、また創造において受動的という内面を持つ姿勢で継続しています。

そして純粋な意識の流れを示す、「Croquis」は、Web 上で記録し続けており、これは全ての繋がりの中で授かるものへ繋がるものを捧ぐものです。これがどのような結果を生むのかは、記録を辞めざるを得ない状況を迎えたとき完了し、動き出すとき知ります。

HP : <http://hiromitsuf.org>